R-18 for ADULT only

あるPのアイドルプロデュース記録

プロデューサーさんは
とても几帳面な人で
担当したアイドルの事は
すべて記録をつけていた
彼女たちの活動に
関することから
そうでない事…
プライベートな事まで
ありとあらゆる事を

彼は彼女たちを精力的に
プロデュースし、
結果も出していたし
私もそんな彼や彼女たちに
協力を惜しまなかった
私と彼は良い協力関係だった。

でも…偶然目にしてしまった
この記録は私を動揺させる
動揺？
動揺だろうか…？

今まで私が彼の方針に
口を出す事は無かったし
私はあくまで彼や彼女たちを
サポートする立場で
活動に関わる必要は無い
この記録は見なかった
事にしてまた明日から
仕事に向かう彼と彼女たちを
笑顔で送り出せばいい

それだけなのに

早く忘れてしまえば
良いはずなのに
私は
それから目を離すことが
出来なかった

大槻唯　○月×日

唯はライブの後必ず甘えて…俺を求めてくる

濃厚なキスにハグ…ステージのテンションが高かったとき程熱っぽく、激しく求めてくる

拒む事は出来ない

唯は甘えるだけ甘えさせた方がパフォーマンスを発揮する

時も場所もお構いなしなのには困ったものだが

鎌倉でのグラビア撮影の時は修学旅行中の中学生数人に目撃されてしまいもみ消すのに少しかかった

今更気にするような顔ではないが

「ねえPちゃん早くぅ…♥」

「Pちゃんの熱いの唯にちょうだい♥」

「今日は一段とせっかちだなもっとゆっくり楽しむのもいいんじゃないか？」

「おとなぶるのだめー♥」

「唯ステージでテンション上がっちゃってもうアツアツなのー♥」

ムちゅっ

「ほらぁ…唯のココすっごく熱くなってるでしょ？」

んぅ

ふぅ

「ああすごい熱気と唯の女の子の匂いでクラクラする」

「実は俺もステージの唯がすごく可愛いからずっとこんなだったよ」

むわっ

「きゃんPちゃんエッチ♥」

「でもうれしー♥」

ずっぷぷぅ♥

「ふぁっPちゃんのきたぁ♥」

ぐちゅぐちゅ

ぐちゅ

はぁ♥

はぁ♥

初ライブ成功の時からこんな調子だ

あの時もこうやってストレートに求めてきた唯が処女だったのには少し驚いたが

ライブでテンションが上がってるせいもあるだろうが貪るように激しく求め合う獣のようなセックス

すぐに果ててしまうといった遠慮はしない

ずっ

ずっ

最初から全開でペニスが膣内の肉壁を削ぎ落とす勢いで子宮口めがけて亀頭を叩きつける

ずんっ

あっ

唯がせっかちに求めてくるのには他にも理由があるからだ

はっ♥

ドプッ
ドプッ
一度目の射精を唯の膣内に注ぎ込む
ペニスを引き抜くと膣肉は惜しむようにヒクつくが今度はそのままがっついたりはしない。
はー
はー
ぬぽっ
唯はその行為以上にその後の甘い余韻が好きらしい
事後の唯はまるで幼い子供のように甘え…
その甘い空気の中今度はゆっくりとそしてねっとりと
敏感になった体を確認しあうようにまさぐりあい…
そのまま二回目のセックスをする
ゴポッ
熱く蕩けた膣穴が今度は快楽を長時間持続させようとねちっこくペニスに絡み付いてくる

普段から自然体の唯ではあるが
きっとこの時が一番
唯が素の自分を見せる時だろう
あっ♥
あっ♥
途切れた緊張と快楽で頭は
働いてないようだが
身体は無意識に反応する
「ふぁ…Pちゃんのので
唯の中いっぱい…♥」
ぴくっ♥
ぴくっ♥
きゅんっ♥
きゅんっ♥
唯とは必ず一度に二回以上セックスをするが
この日はもう他に予定も無かったため
俺のマンションに帰ってさらに二回してしまった。
これでまた唯のパフォーマンスには
期待できるが俺は随分と消耗して
しまった
またドリンクを
補充しなければ…

佐久間まゆ　○月△日

まゆは読者モデル時代の経験からか
生まれ持った素養なのか
常に自分の見られる角度とでも
いうものを計算して演出している

撮影の仕事で俺が口を出す事は
あまり無いのは助かるが…

それは俺に対しても

そんな女の子の
「カワイイ」を体現する
彼女だが俺は
満足していなかった

まゆはスカウトして以来ずっと
俺に積極的なアプローチをしてきたが俺はあえて手を出さずに
効果的なタイミングを
待っていた

だがこれ以上焦らしても
意味は無いだろうし
俺の欲望も我慢の限界に
達していた

ささやかなお祝いがあると言って
食事に誘った後ホテルへ

夜景と海、この小さなお姫様の
想像できるであろう限りの
最高にロマンチックな
シチュエーションを演出する

さすがのまゆも驚きを隠せず
おろおろしていた
こういう所は歳相応の少女だ

「言っただろう？
ささやかだけどお祝いさ
総選挙では頑張ったからね」

「そしてこれからの
まゆのためにも
特別な夜にしたい」

我ながら歯の浮く様なセリフだが
まゆはその気になったらしい

「Pさん…」

「さあ、先にシャワーを
浴びておいで」

したたかなまゆに
心の準備をさせると
何か勘ぐられるかも
しれない

それに俺自身やっとありつける
取って置きのご馳走を早く
味わいたかった

「まゆ、やっぱり俺も
一緒にシャワーを浴びる
ことにするよ」

「Pさん!?」

まゆの返事を待たず
シャワールームに入ると
まゆは恥ずかしそうに
裸体を隠し固まってしまった

ぴくっ

まゆの白い肌が羞恥に
赤く染まる

「まゆが欲しくて
待ちきれなかった」

「み…見ないで
ください…」

まゆも気が動転していたらしく
リボンをつけたままだっただのが
妙に微笑ましかった。

首筋、耳、目蓋、胸、腹、
あらゆる所にキスの
雨を降らせる

まゆはもう夢の中に居るようで
俺のなすがまま身体に降り注ぐ
刺激に身を震わせた

まゆの飾らない素の反応を
引き出せた事に満足感を
覚える

れろんっ

嫌がるまゆの足を広げ
純潔の証を確認する。
誰にも見せた事など無いだろう
その部分を晒され羞恥に
身を震わせるまゆ。

やぁ…っ

ぱぁっ

厚みのある花弁が
彼女らしい。

「Pさぁん…
まゆ…初めてだから…
優しく…」

「優しくしてるだろ？」

だが俺はもう遠慮なんか
する気は無かった。
一気にペニスを突き入れると
まゆは破瓜の痛みに必死に
耐え、俺が不満を持たないように
我慢しているのが解る。

んっ…

ふぅっ

まゆのまだきつい処女孔を容赦なく
ペニスで掘削する。
これが本当の男だと
という事を教え込まなければ
ならない。

…

!?

ずんっ

ペニスを硬く締め付ける
膣内は俺にとっても
強い刺激だ。

その姿はまゆが今まで見せた
どれよりもいじらしく、
可愛らしい。
まゆのファンの奴らにも
見せてやりたい。

メリッ

ぐぽっ
ぐちゅっ
ぐちゅっ
ぐぽっ
だが次第にほぐれて思うさま膣内を掻き回す。
ぐぽんっ
ぐぽんっ
ぐぽんっ
ぐぽっ
初物を自分のペニスに合わせ広げていくのは何度味わってもたまらない満足感だ。
ビュクッ
ドクッ
ドクッ
子宮に精液を注ぎ込まれる初めての感覚に身を震わせるまゆの表情は普通の少女と変わらない。
はっ
だがその後ペニスを抜かせてくれず長い時間抱きついたままだったのはやはりまゆという所か。
こうしていれば受精が確実になると思っているのだろうか。
俺は征服欲が満たされるのを感じていた。
その姿がいじらしいのでそのままにしておいた。
孕ませてしまっても愛梨のように暫くメディアへの露出を抑えればいいだろう。
ゴポッ
ドロッ

鷲沢文香 ○月○日

営業で訪れた愛媛の街で
彼女を見つけたのは――
まさに僥倖だった

伸ばしすぎた前髪の奥で
なお隠し切れない輝き…

彼女の瞳には
人を魅了する力がある

俺のプロデューサー
としての勘が

そして男としての本能が
彼女を見過ごす事を
出来るはずも無く

半ば強引にスカウトし…

彼女を事務所に迎えたその日に
処女を奪っていた

驚いていたようだが
ほとんど抵抗も無く

文香はただ涙を流した

美しかった

それ以来脅したりした訳でもなく
文香は俺に従順に従う

おそらくそれは彼女の
元々の素養なのだ

しかしそんな文香の性質は
アイドルに向いているとは
言えない物だ

杏や乃々のように
消極的という
わけではないが…

あまり自分を主張するという
事が無い

それではただの目立たない
アイドルになってしまうかもしれない

文香には見られる事の悦びを
教え込まなければならない

あえてビデオを撮っていることを
告げた上で見る人間を
興奮させるように
命じる。

「…贅沢文香です…」

「…これから…
オナニーを…します…」

「私の…エッチな所を見て…
お…おちんちん…しごいて…
気持ちよく…なってください…」

「…クリトリス…指で…
弄っています…」

「…ここが…一番…
感じます…」

まだぎこちないが
文香はこんな事でも
一生懸命にやろうとする。

「…少し…痛いけど…
爪で…引っかくのが…
気持ち…良いです…」

ふぅ

はぁ

ん…♡

ぷぐ

ぷぷ

「よし、オナニーは
そこまでいい」

「次はチンポを
おねだりするんだ」

むわっ

ぞくぞく

「はい…オナニーで…
イったばかりで…
だらしなくなった…
オ…マ…オマンコです…」

「…こんなはしたない穴で…
よろしければ…」

始めの頃は拒絶はしないものの
泣くばかりだった文香もようやく
教えた通りに言えるようになった。

ひく

ぴく

ぴく

「…どうか…お…オチンポを
入れて…気持ちよくしてください…」

乱暴にペニスを挿入し
オナホールのように扱う。

ぬぐっ♡

ぬぷっ♡

…っ♡

う♡

だが反応が薄かった文香も
いつの間にかペニスに
合わせて腰が動くように
なっていた。

性感の開発が進んで
いるのを実感するが
文香自身は気付いて
いるだろうか。

射精と同時に
膣内が痙攣する。

ひくっ♡

ひくっ♡

ドプッ♡

きゅんっ♡

子宮が精液で
満たされる悦びで
身を震わせる。

ふぅ♡

ゴポォ♡

膣内射精で絶頂出来るように
なった文香に手ごたえを感じる。

この色気がステージ上で
出せるようになれば
本格的なデビューをしても
大丈夫だろう。

ふぐ♡

これからはステージ上での
調教も視野に入れてスケジュールを
調整する事にしよう。

はー♡

はー♡

はー♡

城ヶ崎美嘉　×月○日

誰がそんな風に呼び始めたのか
美嘉はカリスマギャルとして
名を馳せ

俺がプロデュースした
アイドルの中でも
特に成功したうちの
一人だ

しかし本当の美嘉は
カリスマギャルと呼ぶには
真面目で純真過ぎる少女だ

妹の手前立派な姉で
あろうとする故だろうか

常に自分の欲求を
抑え込んでいる

「プロデューサー…
ここどこ？」

「やっぱアタシこんなの
恥ずかしいよ…」

だから俺が美嘉の心を開放する
手助けをしてやらねばならない

「いいから
コートを脱ぐんだ」

「…こんな事ばっかりさせて…プロデューサーのヘンタイ…っ」
口では拒んでいても刹那的な衝動への期待で身を震わせている
俺が時間を掛け美嘉の身体に染み込ませた感覚だ
ぞく…
ぶるっ
「ふ、プロデューサー!?ここ、公園!?」
「こんな人がきそうな所じゃ…!!」
「心配するな嫌ならこのまま帰ってもいいがおさまりがつくのか?」
「…っアタシをこんな風にしたのプロデューサーなのに…っ」
「こんなトコ莉嘉に見られたら…」
はぁ
ドキ♥
はぁ
そう言いながらも美嘉の膣肉はペニスをスムーズに飲み込んでいく。
既に膣内は熱く濡れていた。
ドキ♥
にゅぷ…

美嘉は落ち着かない様子でしきりに周りを気にしていたが…

その膣内はいつも以上に熱くぬめり蠢動してペニスに絡み付いてきた。

「おい、見ろよ こんな所でヤってるのが居るぜ」

「素っ裸じゃん 変態?」

「……っ!?」

「ぷ、プロデューサー! 人が……!」

「声を出すと素性がバレるぞ?」

「……!?」

「や、だめ。プロデューサー……っ 今、だめ、突いちゃ……っ」

「女の方どっかで見たことねーか?」

「あ、アイドルの…… 似てるけどまさか本物?」

「あー！そうそう城ケ崎美嘉！！カリスマギャルの！」
「マジかよ！こんな所で素っ裸で生ハメなんてやっぱりスゲービッチなんだな！」
「ち…ちが…アタシ…そんな子じゃ…」
「み…見ないで…っ」
「ケツの穴丸見えじゃん！あれでアイドルかよw」
「デカチンずっぽり入ってるよありゃ相当ヤリまくってるぜ」
「人前で腰振りまくってよく言うぜビッチが」
「そらイケよ！イキそうなんだろ?」
「いーけ！いーけ！」
「違うのぉ…っアタシ…こんなエッチな子じゃないのにぃ…」
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
ずぷっ
だめぇ
だめぇ
だめぇ
だめぇ
だめぇ
ゆさ
ゆさ

「うお！中出しされてマジイキしてるぜ！」
「スゲー、写メ撮ってアップずるわ」
びくっ
びくっ
ぶしゅっ
ゴポッ

「…どうしょう…アタシ…こんな…」
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
勿論男たちは俺の仕込みだが美嘉にば暫く黙っていても面白いかもしれない

千川ちひろ　△月□日

バサッ

バサッ

ドッ

「ぷ、プロデューサーさん!?な、何を…!?」

白々しい言葉と頭の中で自分を傍観する私が居る。

ずっ♡

予感はしていのに。私はろくに抵抗もしないまま彼のなすがままに純潔を散らされていた。

痛みは一瞬だった。

ずっ♡

身体の奥底から雌の本能が歓喜の声を上げているのが解る。

「本当はずっとこうされたかった」

ずっ♡

ずっ♡

ずっ♡

ずっ♡

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

あの記録を見たときから自分の番はいつか、そんな事はあるのか、そればかり考えていた。

あっ
あっ
きゅっ
びくっ
この歳まで経験の無かった私の身体を彼の指先が巧みに弄び快感に痺れさせる。
すぐに何も考えられなくなった。
きゅっ
びくん
ブプ
L
ブプ
プッ
私はあっけなく、そして何度となく絶頂に追いやられ
膣内から溢れるほどに彼の遺伝子を注ぎ込まれた。
ビュクッ
ビュクッ
ビュクッ
はっ
はっ
はっ
はっ
胎内に溢れる生暖かさに不思議な安心感を感じる。
彼と私の絆が確かな物になったのだ。
私たちはずっと一緒。
だって、どんなアイドルよりも彼にとって必要なのは私だから。
きゅん
きゅん
ゴポッ

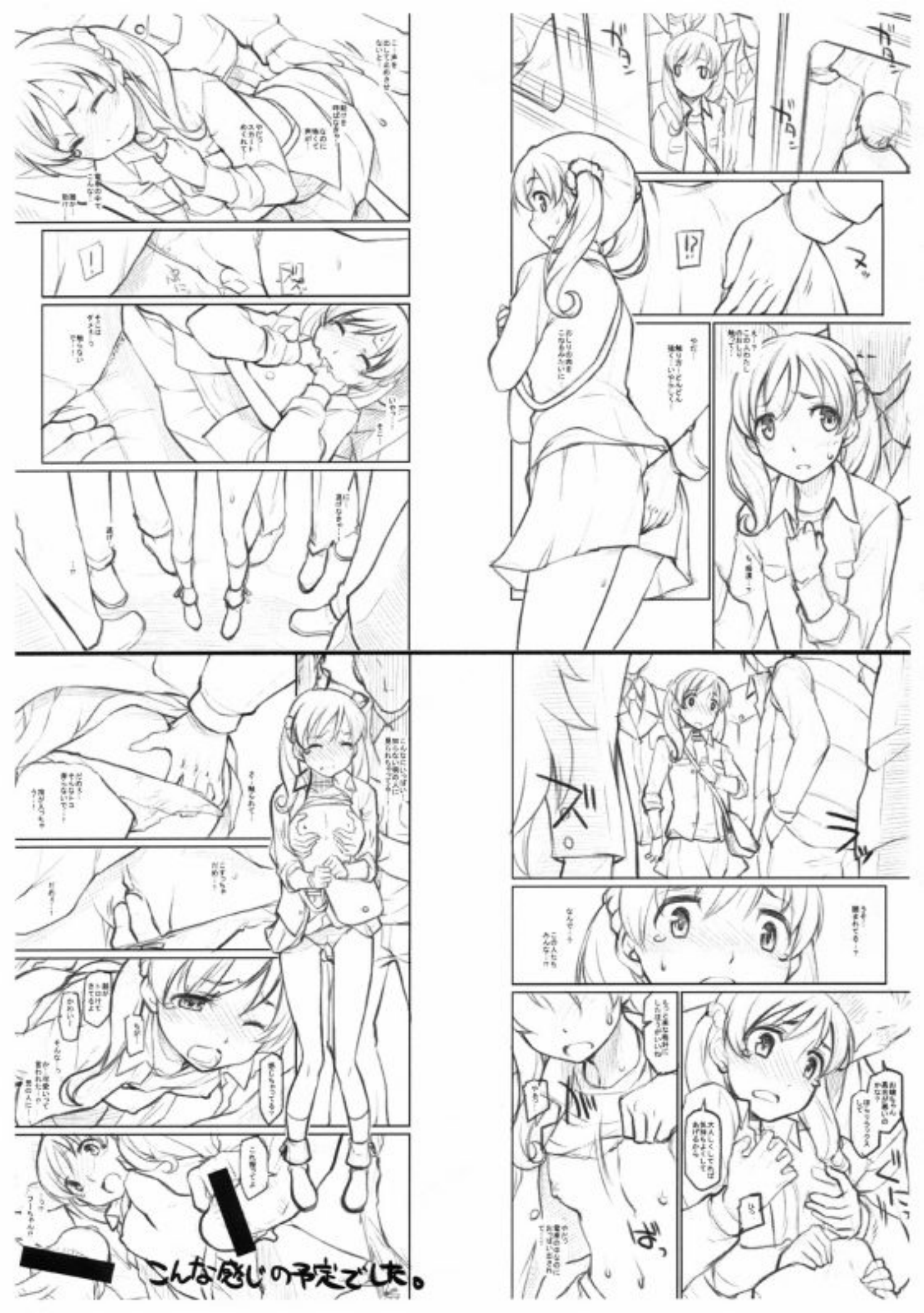
■奥付■

あるPのアイドルプロデュース記録

発行:あつあつむちむち
久川ちん
his15@iris.ocn.ne.jp
http://tinnn.blog.fc2.com/
twitterID:tinnn

2013/8/11

■印刷■
アクシス出版様


ガタン
ガタン
!?
ズッ
ぎゅっ
ぎゅっ
ズズ
ズズ
こんな感じの予定でした。

本をお手にとって頂き
ありがとうございます。
2013.8.11.
C84
あつあつむちむち
スッちん。